

## 20240105 インクルーシブについて考える

新年明けましておめでとうございます。今年こそ、平和な年に！穏やかで実りある年に！と念じていた正に元日に、震災がありました。お亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈りするとともに、ご遺族に対しお悔やみを申し上げます。また、被災された方々にお見舞いを申し上げます。本年度も残すところあと3カ月となりました。ここから先は、年度末に向けてあっという間の日々になると思います。本年度の総仕上げとともに、来年度に向けて、そしてそれぞれの一步前進に向けてスタート切ってまいりましょう。

今回は、黒柳徹子さんの詩をご紹介します。今年のスタートは、その詩からインクルーシブについて考えたことをお伝えしたいと思います。

考えるきっかけになったくだりは、以下の部分です。

「私の小学校、  
トットちゃんの学校には  
体の不自由な子が何人もいた。

私の一番の仲良しは  
ポリオ（小児マヒ）の男の子だった。

校長先生は、  
一度もそういう子たちを  
「助けてあげなさい」とか  
「手をかしてあげなさい」とか、

いかなかった。

いつも、いったことは、  
「みんないっしょだよ。  
いっしょにやるんだよ」  
それだけだった。

だから私たちは、  
なんでもいっしょにやった。

ああ、そうだった。これがインクルーシブだと心から思いました。  
昨年、市を挙げてインクルーシブを推進しようとしている学校の校長先生からお話を聞く機会がありました。「障がいのあるなしにかかわらず、皆が一緒に学ぶという理想には賛成であるけれど、そのために人や施設・設備等を十分整える必要がある。それが不十分なままスタートしても現場への負担感ばかりが大きくなり、結果的に上手くいかない。」と、不安を語ってくださいました。  
なるほど理想は大事だけど、現実におすすめとなると、いろいろ大変だなとその時は思いました。障がいが重い子どもも含めて全ての子どもを例外なく通常学級に入れるべきだという考え方は、フル・インクルージョンといますが、十分な支援や環境を整えないまま通常の学級に障がいのある子どもを入れることは、「ダイビング（放り込み）」と呼ばれ、インクルーシブとは異なるものだといわれます。それはそうでしょうと、思います。担任の負担うんぬんを言う前に、当の子ども自身が困るでしょう。だから、インクルーシブを語る時、必ず「人的支援はどうか」「施設面は大丈夫か」と環境面への議論が熱心に行政と学校と当該の保護者や支援の方々で交わされます。

しかし、どうしてもそこにどうしようもない「違和感」を感じていました。その理由がこの黒柳さんの言葉ではっきりしました。トットちゃんの学校には、介助員や支援員はいたのでしょうか？設備は整っていたのでしょうか？障がいのある子を支えていたものは、一体何であったか？それこそ、それは大人の方ではなく子ども同士の支え合い、心の通い合いだったのではないのでしょうか。それは、どうやって出来上がったのか？それこそが、子どもを信じる心だったのではないのでしょうか。

思い出しました。私も似たような経験をしたことがありました。教員6年目。初めての卒業生を出して迎えた初任校最後の年の学年は3年生でした。この学級にあきら君（仮名）はいました。あきら君は重複癲癇でした。重度の癲癇と知的障害、運動障害をもっていました。転んだ時のためのヘッドギアを付け、下半身に装具を付けていないと歩くこともできず、癲癇をおさえる薬の副作用で、授業中の大半は意識が朦朧としている状態でした。ほぼ毎日机を吹き飛ばすほどの大きな発作を起こしました。全身を痙攣させ口から泡を吹いて苦しむ彼の手を握って、体をさすることしか私にはできませんでした。お母さんは、「この子を通常の学級でお願いします。医療的にはお金をかければいろいろしてあげられます。でもいくらお金を積んでも、この子に友達をあげることはできないんです。この子にこの学級で友達をつくってあげてください。」「もし、発作が起きて学校で命にかかわる事態になったとしても、絶対学校を恨みません。」ともいわれました。たった1年の関わりでしたが、この学級は、私にとって奇跡の学級でした。あったかいのです。学級の中心にはいつもあきら君がいました。あきら君が大きな発作を起こす時、それはきまって授業が盛り上がっている時や集中して静かな時でした。「うううっ」とうなり声に続いて激しい痙攣が起きます。あきら君に駆け付ける私の後ろから、「ごめんね」「ごめんね」と子どもたちが声をかけるのです。「ぼく集中していて、一瞬あっくん

のこと忘れていたよ」「私も一瞬あつくんのことをわすれていた」みんな祈るような表情です。痙攣が収まると、あきら君はほっとした表情ですっと寝てしまうのが常でした。「この子たちの心は確かにつながっている」理屈を超えた実感でした。あきら君には介助員はいません。教室にも彼の動線にも彼のための手すりさえありませんでした。でも、子どもたちの輪の中であきら君はいつも笑顔で安心して生活していました。

インクルーシブの肝は何か、

「みんないっしょだよ。  
いっしょにやるんだよ」  
それだけだった。

これは、理想論でも夢物語でもない。現実にそれを行っている教育があった。人が人を人として支え合う。支えてそして支えてもらう。もちろん、制度もシステムも施設も大切であることは間違いないだろうけれど、子どもたち同士の心の絆こそがインクルーシブを支える基なのだと思います。そこには、もう障がいの有無は関係ないとすら感じます。

私が勤めた3校目、渋谷区立上原小学校は、三坂岑世校長先生のとくに、「知育・徳育・体育」から学校教育目標を「ともに学び、ともに生きる」に変えました。三坂先生は、私が赴任した時すでに末期癌でした。定年間際の1学期は、入院しながら病室で指揮を執られました。そして、そのままご退職、ご逝去されました。先生が目指されていたのも、インクルーシブだったと思います。